

<今日の説教のポイント 出エジプト記5章1～6章1節>

1 (1-3) 主(ヤハウエ)を巡る妙なやり取り? そこにこそ主題あり。

モーセは主を知らないファラオに、「イスラエルの神、主が…」(1)と語り、ファラオから、「主とは何者か。…わたしは主など知らない」(2)と言いつ返されました。主にこだわった妙なやり取りだなと思いますが、この「主とは何者か」こそ、今後のファラオとのやり取り全体の主題であり、そのことをファラオは知ることになるのです。イエス様が大祭司やピラトから問われたことを思い出します (マルコ 14:61, 15:2)。

2 (4-19) 抑圧者が考えることはいつの時代も変わらない。

モーセの要求を受けてファラオが考えたことは、イスラエル人に課している労働に穴が開くということです(4)。そこで出した命令は、彼らにさらに過酷な労働をさせ、文句を言う気力を失わせると共に、余計なことを考える暇を奪うという、いつの時代の抑圧者も用いる手段でした(9)。「怠け者」(8,17)と罵倒して尊厳を奪うのも、イスラエル人を手下に採用して分断を計るのも(14)、ナチスが用いた手法です。過去の歴史からしっかり学び、悪に負けない強さを身に着けたいものです。

3 (20-23) 主を責めるのは正しいか? 主への信仰が問われる時。

しかし、この時はイスラエル人はファラオの企てにはまり、民はモーセに、モーセは主に抗議します。最終責任は神様にあるというわけですが、そう考えたことは本当に正しかったのでしょうか。大きなことを成し遂げる時ほど試練は付きものです。この後の6章1節の力強い主の言葉を聞き、実際、その時に言われた仕方で主が事を為されて行ったことを思う時、もう少し主を信じるべきだったのではないのでしょうか。

4 (6:1) 主の約束は実現する! それを信じて待つのが真の信仰者。

「今や、あなたは、わたしがファラオにすることをみるであろう。わたしの強い手によって、ファラオはついに彼らを去らせる。私の強い手によって、ついに彼らを国から追い出すようになる」(1)。「主とは何者か」をはっきり示している言葉です。どんな時にも必ず「主の強い手」が働くことを信じて歩む。それが真の信仰者の姿なのです。私たちはどうでしょうか。何か悪いことが起こるとすぐに慌て、「神様なぜですか」と訴えてはいないのでしょうか。 考えさせられ、教えられること多い箇所でした。